

# THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2019年9月1日発行  
発行者 本多 弘之  
編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)  
〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11  
TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901  
e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp  
ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>  
Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>  
Twitter [https://twitter.com/shinran\\_bc](https://twitter.com/shinran_bc)

2019.9  
第70号

## 祖父が生きていた「足跡」

親鸞仏教センター研究員 藤村 潔

センターに着任し、数ヶ月が経とうとしている。首都圏で仏教の研究ができることは、しあわせなことである。と同時に、単身赴任であるため夜になると無性に妻子が恋しくなる。

また、この年齢に至ると実家で過ごした家族団らんの日々を思い起こすことが、しばしばある。私は愛知県生まれで、3人兄弟の末っ子、7人家族。実家の寺院は曾祖父から今に至るまで説教師一家である。小学生の頃、夕方コタツで寝ながらテレビを観ていると、母親から「おじいちゃんが帰って来たから、ちゃんと起きて『お帰りなさい』を言いなさい」と、注意されたものである。私の祖父(伊奈教雄、1917-2004)は寡黙な性格で、大変気難しい人だった。汗を流して畑仕事をするような「おじいちゃん」ではなく、どちらかと言えば、書齋に籠もって、好きな洋画を鑑賞し、読書にふける人であった。大正ロマンの気風なのか、質素な生活感がまったくなく、サイダー水が好物であったり、背広やコートにもこだわっていた。

私が高校生のある時、祖父と私と2人だけで夕食をとる機会があった。たまたま、戦時中の話になった。祖父は大学卒業後、すぐに開教使として従軍し、満州へ渡った。仕事は、現地に居住する日本人の為に葬儀や法事といった仏事全般を勤めるものであった。ある夜、日本人が亡くなり、枕経のために、軍人の護衛がつき現地まで馬車で送迎された。祖父は「緊張感が張り詰めていた車内の光景は、今でも忘れられない」と言っていた。原住民に夜襲される恐怖があったからである。

当時、およそ30万人の日本人が新天地を求め、満州に渡った。祖父亡きあと、自分を生み出したルーツを知りたく、友人の協力を得て、当時の情報をいろいろと調べた。そこで判明したのが、祖父は「満州開拓勤労報国隊」の一員として、昭和13年(1938)9月10日から12月3日までの3ヶ月程度、「安東県布教所」(安東別院、現在の遼寧省丹東市)に勤務していたということであった(木場明志・程舒偉『日中両国の視点から語る植民地期満洲の宗教』柏書房、2007)。生前中、祖父が「満州(安東)は寒い所で、街全体が石炭の煙で覆われていた。それで、肺を患い早々に帰国した」と話していたが、その事実とぴったり一致した。

その後、ソ連軍の侵攻や敗戦により満州国は崩壊した。戦争の惨劇は決して繰り返してはいけない。しかし、祖父は「日本は一生懸命戦った…そして負けた。…ただそれだけだ」と、もらしていた。その時代の地平に立って戦争を語る祖父は、当時の日本に対する不満を言わなかった。むしろ、多くを語らず心に秘めていたような後半生であったように思える。

『歎異抄』には、「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」(『真宗聖典』640頁)と説かれる。我々が現代人の感覚で、当時起きた出来事を評価することは容易であるが、その時代に命を燃やした人々の肉声を決して忘れてはならないだろう。なぜなら、祖父から教わった記憶が、そのまま祖父の生きていた「足跡」として遺るからである。

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

## 「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ④9

# 今、仏に値う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第121回と122回は東京国際フォーラム（有楽町）、123回はビジョンセンター東京八重洲南口で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第118回から一部を紹介する。

（囑託研究員 越部良一）

### ■無量寿仏の声を聞く

「今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし」（『真宗聖典』〔東本願寺出版、以下『聖典』〕64頁）。「今」、今と、このあたりでは繰り返されますね。今、仏に値う。仏に値遇する。見仏とも言うのですけれど、ここでは「値仏」と。仏にまみえる。弥勒菩薩が今ここで対告衆を代表して仏に教えを聞いているわけですが、仏に値うというのは釈迦如来の教えに値うということ。その釈迦如来の教えは無量寿仏の声を聞かせるための教えである。無量寿仏の声を「みな」とルビを振っています。無量寿仏の御名を聞く。聞くというのは、これは第十八願成就の文の「聞其名号」（『聖典』44頁）の「聞」を示しているわけです。「無量寿仏」というのは、「南無阿弥陀仏」で、「南無阿弥陀仏」という御名には、声がある。声なき声が御名である。

親鸞聖人は、この『大無量寿経』は真実教だと押さえられて、真実教の体は名号だと。そして名号は本願を説き、法蔵菩薩の本願を開いてゆくという形で、名号がどういう意味をもって衆生に願をかけているのかが教えられてくる。そういうことが、この經典のもっている大事な二本柱、宗体と言うのですけれど、宗と体です。体は名号である、宗は本願を説くことだと。こういうふうに通じられているわけです。ここでは、仏に値うことは仏の教えに値うわけですが、仏の教えに値うということは無量寿仏の声を聞くのだと。

そして、「歓喜せざるものなし」。十八願成就文の「信心歓喜」（『聖典』44頁）です。もし、聞くことができるなら、「聞其名号」が成り立つならば、



信心歓喜であると。本願成就の文では、本願はどこに成就するかと言ったら、「其有衆生」、「それ衆生ありて」（同上）と。この衆生は凡夫です。その凡夫が名号を聞くことができるならば、信心歓喜する。こう本願成就の文が語っている。

### ■本願成就とは「聞其名号」、信心成就

本願が成就したとは何のことだろうと、なかなか意味が分からないのです。それはやはり『無量寿経』の教えを聞いてきた、聞き当ててきた歴史があって、その歴史に出遇ったのが親鸞という人です。親鸞聖人は「聞其名号」ということ、ここに本願成就の意味があると。それは信心が成就するということだと。「本願信心の願成就」（『聖典』228頁）と、こういうふうにおっしゃる。願が成就したということは、我々に信心が与えられたということだと。我々に信心が起こるのは本願が成就したのだ、如来の大悲の本願が成就してくださったのだと。こういう意味をもって我々に本願を信ずるという体験が起こる。自分で信ずるわけではない。自分に信ぜずにおられないという心が立ち上がって来るのは、如来の本願が成就するのだと。こういうのが、親鸞聖人の了解の仕方です。

「無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし。心開明することを得つ」（『聖典』64頁）。今ここでは弥勒菩薩が、衆生を代表して、我が心が開かれて明るくなることのできたのだと言っているわけです。この人生は暗い業の歴史、悪業の歴史の因縁で苦悩の人生しかない、そういう絶望状況のように見える中に明るみが見えたということが教えられてくる。

松原祐善という大谷大学の学長もなさった方が、この「今得値仏 復聞無量寿仏声」、この言葉を揮毫しておられたことがありました。松原先生はなぜ『無量寿経』のこの言葉を書かれるのかなど、その文字を読んだとき、私は何かちょっと不思議な思いがしました。実は、ここで今、申しましたように、この「今得値仏」の仏は教主世尊で、そして「また無量寿仏の声を聞きて」、これは本願成就を表している。そう気づいて見ますと、松原先生の書かれた文字の意味が、「ああ、そうだったのか」といだける、松原先生と改めて出遇ったような、大変嬉しい思いがしたことです。

（文責：親鸞仏教センター）

# 第16回 親鸞仏教センターの つどい

竹村 牧男 氏(東洋大学学長)  
本多 弘之 (親鸞仏教センター所長)



4月16日に東京都千代田区の学士会館講堂において、第16回親鸞仏教センターのつどいを開催した。

第1部の「おつとめ」を親鸞仏教センター（文京区）において行い、その後、会場を学士会館に移し、第2部の「記念講演」と「交流懇談会」が行われた。さまざまな分野から約60名の有識者の方々が集った。記念講演では『アンジャリ』第17号にご寄稿頂いた東洋大学学長の竹村牧男氏が「往生のその先について」の講題のもと講演を行った。

(囑託研究員 大谷一郎)

竹村氏は「親鸞浄土教の基本」、「弥勒使同・如来等同」、「往生による成仏の意味とは」、「還相とはなにか」、「還相はいつはじまるのか」という5つの視点に沿って論を進めた。

まず、親鸞聖人が第十八願を「至心信楽の願」と名づけたことに触れ、『無量寿経』下巻冒頭の本願成就文にある「一念」は念仏ではなく、如来よりたまわたりたる「信心」であり、その「信」は「聞」より生まれ、そこに救済があることが親鸞浄土教の根本にあるとし、また、浄土に往生して救われるということはどういうことなのかを、自己の救いの問題として自覚していくことが重要であることを指摘した。

そして、浄土に往生するということは、実体としてどこかに生まれるのではなく、曇鸞大師の言う「無生の生」の世界が開けることであり、親鸞聖人においては、無生の世界に生まれることと、無上覚を覚ることであると領解した。つまり無上涅槃と無上仏は一つであって、我々が弥陀の本願力によって大般涅槃を証するとき、自己としての個は消えるのではなく、無上仏として実現する。さらにはむしろ方便を生きる個として、自利利他円満の存在ともなり、自在に方便を示現して具体的に利他に生きる者となると述べた。また、浄土教において、その利他の主体を完成することが浄土に往生するという事の本質的内容であるという明瞭な認識、了解が必要であるとした。

最後に道元禅師の『正法眼蔵』の言葉を引き、

弥陀の本願に本当に救われていないうちは、あたかも救われたかのようにそこに安住してしまい、しかし本当に弥陀の本願に貫かれたなら、この生き方では申し訳なく、不足の身であることを自覚し、足りないながらも自信教人信を尽くさざるを得なくなると論じた。また、鈴木大拙の「極楽に行ったらすぐに還ってくる」という言葉を講演の初めと終わりに引用し、還相ということは決して死後の問題ではないことを指摘した。

続いて、本多弘之所長が「願生心と菩薩道」と題して講演。まず、大乘仏教の菩薩道においては、自らの作為や分別なしに利他行を自在に行うことが究極的なあり方として求められるようになっていったが、いくら求めて行っても、無分別、自在に菩薩道を生きることが可能にならない人間というところに、浄土を求めずにはいられないという要求が生じ、そのことが、『無量寿経』が本願を説く背景にあるのではないかと論じた。

そして、親鸞聖人は、如来からの光に照らされた自覚、無明煩惱にみちているという自らの深い自覚のもとに、それまでの菩薩道の回向というもの『無量寿経』所説の本願力の回向であるとし、回向の主体は阿弥陀如来であり、回向という形で呼びかける大悲のはたらきがあると読み解かれた。そして、親鸞聖人は、真信心を得ることが何よりも大事なことであり、それを得るということにおいて、如来の悲願と相応するような眼が開けるということを、一生をかけて明らかにしようと述べた。

最後に、菩薩道の課題を願生心をとおして我々はいただくことができ、その願生ということも凡夫の心が願うのではなく、如来の願いが根拠になっており、本願を信ずることの中に「願生彼国 即得往生」が成り立っているというのが、親鸞聖人の了解であると結んだ。

(文責：親鸞仏教センター)

## 井上円了と清沢満之



井上円了と清沢満之。共に東本願寺の留学生として東京大学哲学科で学んだ二人は、それぞれ仏教の近代化に大きく貢献した人物として知られている。一方の井上円了は、真宗寺院の長男として生まれながら、大学卒業後は宗門を離れて独立して活動した。他方の清沢満之は、武家の家に生まれながら宗門に見出され、大学卒業後は宗門改革運動や宗門教育に従事した。対照的な歩み<sup>たど</sup>を辿ったとも言えるこの両者は、円了の哲学館の設立に清沢が深く関わっていたことにも示されているように、共通の課題を有してもいた。また、哲学的営みを通して自身の思想や信仰、活動を練り上げていったところにも共通性がある。

そこで今回の「清沢満之研究交流会」では、2019年の井上円了没後100年にあわせて、井上円了と清沢満之を比較対照しながら、両者が近代の仏教史・思想史において果たした意義をあらためて考えた。以下、それぞれの発表要旨と、それに対するコメント、および質疑応答の一端を報告する。

(親鸞仏教センター研究員〔当時〕 長谷川琢哉)

### 研究発表

#### I 「井上円了と清沢満之」 ——仏教の近代化と「哲学」—— 長谷川琢哉 (親鸞仏教センター研究員)

井上円了と清沢満之は、自身の仏教的な思想・信仰・実践を練り上げる上で、それぞれが東大で学んだ「哲学」を積極的に用いている。しかし、清沢が円了の試みをしばしば批判的に見ていることからもうかがえるように、両者においては「哲学」の役割や意義が異なるようにも見える。そこで本発表では、円了と清沢にとっての共通の背景である明治中期の東本願寺の教学機構へと遡り、両者が東本願寺の留学生としていかなる課題



を担っていたのかを確認した。そこから見えてきたのは、仏教をひとつの「宗教」として位置づけるための「哲学」の役割である。円了と清沢にとって、哲学は「宗教」という固有の領域を切り開くために不可欠なものであった。しかしその上で両者にはそれぞれ異なる問題意識があり、そこから思想と実践における強調点の差異が生じていく。本発表が取るこうした視点は、後年、教育活動へと重点が置かれるようになる両者の活動を比較するに際しても、有用なものとなるだろう。

#### II 「井上円了と清沢満之」 ——宗教と信の問題を焦点として—— 星野 靖二 氏 (國學院大学研究開発推進機構准教授)

本報告は井上円了と清沢満之を、宗教をめぐる同時代的な文脈に位置付け、それぞれがどのような「画期」をなしたのかについて検討したものである。明治前期から中期にかけて、仏教徒はキリスト教徒と競合しながら自らを弁証する必要に迫られており、知識人教化が一つの課題となっていた。そうした状況において合理的宗教論が要請され、井上円了は哲学的宗教として仏教を論じることでこれによく応え、一つの画期をなした。これに対して、やがて古河老川<sup>ふるかわろうせん</sup>のように合理的宗教論の限界を指摘し、その批判的乗り越えを試みる論者が出てくる。そのような時代状況を背景として、清沢満之は合理的宗教論を経由した上で、あえてそうではない形で自らの信を語った。こうした清沢の議論に対しては、例えば主観的に過ぎるといった批判が同時代においても出されたが、それでも自我の問題に悩む青年などに積極的に受け入れられることになる。その意味で清沢は



実存的宗教論を提示し、共有することによってまた一つの画期をなしたと論じた。

### III 絶対・相対の関係と『大乘起信論』

佐藤 厚 氏(専修大学ネットワーク情報学部特任教授)

絶対・相対とは哲学、宗教において世界を捉える際の基本的な枠組みである。日本の明治時代の仏教哲学においては『大乘起信論』をもとにして「真如即万法、万法即真如」という形で実在(絶対)と現象の世界(相対)との一致が説かれた。本発表では井上円了と清沢満之の二人が、この『大乘起信論』の絶対・相対の関係をどのように解釈したかを検討した。



結論は次の通りである。真如と万法との関係を、円了は基本的に発生論的、因果論的に解釈し、真如一元論ともいえる思想を示す。それに対して清沢は、両者を因果論で解釈することを批判して同時並立的に解釈するほか、真如縁起を浄土教の文脈に適用させる。両者の学問背景はほぼ同じであるが、このような違いが生まれたのは、真如論を基にした仏教体系の構築を目指した円了と、浄土教の哲学化を目指した清沢という思想課題の違いがあると考察した。

## 全体討議

司会 名和 達宣 氏(真宗大谷派教学研究センター研究員)

コメンテーター 岡田 正彦 氏(天理大学人間学部教授)

今回の研究会では、清沢満之と井上円了が学んだ哲学の共通性と構築した思想の差異(長谷川)、合理的宗教論と実存的宗教論のそれぞれの「画期」について(星野)、二人の『大乘起信論』の読解の差異(佐藤)というように、どの発表も二人の思想家の同時代性を意識しながら、両者のスタンスの差異を浮き彫りにしている。

このため、コメントの冒頭に近代の仏教思想に共通する重要問題の一つであった「須弥山説」に



対する二人の見解を紹介し、両者の仏教思想の「近代性」について問題提起をした。真如から世界を考える井上円了と信の一念から世界を見る清沢満之の須弥山説の違いは、社会教育と宗派教育、合理的宗教論と実存的宗教論、仏教哲学の体系化と浄土信仰の哲学的基礎づけといった、シンポジウムで強調された両者のスタンスの差異とも連動しているのではなかろうか。

## 研究交流会を終えて

今回の研究会で、発表および討論を通じて、井上円了と清沢満之の共通性と共に、その対照性が深く掘り下げられたように思う。両者は東京大学で哲学を中心とした西洋近代の学問を学び、また同時に『大乘起信論』のようないわゆる「印度哲学」、あるいは仏教の「余乗」を学んだ。そうした学習は、円了と清沢それぞれの仏教思想の形成にも大きく反映している。しかしながら他方で、東大卒業後の井上円了が、哲学館を中心に、より「通仏教」的な方向性を推し進めたのに対して、清沢は真宗的な方向性、あるいは「他力門」的な方向性を明確化していくことになる。討論の中では、こうした円了と清沢の仏教に対するアプローチの共通性と差異が確認され、さらにそのことが、明治期の仏教界全体の動きとも関係づけられた。すなわち、明治初期から中期にかけては「通仏教」的なものが重視されていたのに対して、明治後期からは徐々に宗派性が再び強調されていくようになるということである。

そして討論では、そこから円了と清沢のそれぞれの教育活動の内実にも議論が及んだ。哲学館と真宗大学は近い位置にありながら、ある意味では対照的な性格を有しており、ここにも通仏教性と宗派性という差異が際立っている。今回の交流会では、井上円了と清沢満之を共通の土台から見直し、そこから両者がそれぞれの課題を深めていく様が明らかになった。また、井上円了と清沢満之を並べた場合、ともすれば清沢の方に強調点が置かれがちだが、今回の交流会では、むしろ近代仏教史における井上円了の重要性に光を当てること出来たのは大きな収穫となった。井上円了の没後100年という年に、あらためて円了と清沢を比較するという試みは、今後の研究を活性化させるという意味でも意義のあるものになったのではないだろうか。

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第61回

# トマス・アキナスにおける「恩寵」と「自由意志」

山本 芳久 氏（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

2019年3月15日、東京大学大学院総合文化研究科准教授の山本芳久氏をお招きし、「現代と親鸞の研究會」を開催した。トマス・アキナス（1225頃-1274）はカトリック神学に極めて大きな影響を与えた神学者であり、山本氏は日本におけるトマス研究の第一人者である。本研究会では特に「恩寵と自由意志」にテーマを絞り、非常に刺激的な問題提起をいただいた。ここに、その一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員〔当時〕青柳英司）

## ■ 1、神によって動かされた自由意志

トマスの主著である『神学大全』の中に、「人間は恩寵の外的扶助なしに、自分自身によって自らを恩寵へと準備することができるのか」という項があります。「自らを恩寵へと準備する」とは、「回心する」ということです。

この問題に対してトマスはまず、「神への人間の回心はたしかに自由意志によって為される」と言います。人間が救われるための不可欠な要素として、人間の自由意志を重視したのです。

ただ、トマスは同時に、それが可能であるのは神のはたらき、つまり恩寵があるからだと言います。人間は回心することを神によって命じられており、人間は自由意志に基づいて回心することが可能なのですが、それが可能であるのは、神が人間の自由意志を神へと向けさせているからだ。トマスは恩寵と自由意志との関係を、このようなある種の入れ子構造で考えているのです。

さらに別の箇所では、「恩寵の賜物を受けるための準備を為すところの、自由意志の善い運動そのものも、神によって動かされた自由意志のはたらきなのである」と言っています。ここでは「神によって動かされた自由意志のはたらき」という、非常に微妙な表現が使われています。神によって動かされているのであれば、自由意志ではないのではないかと考えたくなります。しかし、何かに心を動かされることと、何かに強制されることとは、必ずしも同じではありません。

たとえば、ダンテ（1265-1321）の『神曲』に心を動かされて文学研究者となった、という例を考えてみましょう。この場合、文学研究者になるということは、別に必然的に動かされたからではあ



りません。ダンテの『神曲』によって心を揺り動かされても、文学研究者でない仕事を選択することも十分に可能だったでしょう。何かによって心を動かされることと、それによって強制されることは、別のことなのです。

## ■ 2、恩寵の必然性

この「必然性」について、もう少し見ていきましょう。『神学大全』の中に、「恩寵へと自らを準備する者、あるいは自らが為しうることを為す者にたいして恩寵は必然的に与えられるか」という項があります。

この問題に対してトマスは、2つの仕方でも考察をしています。1つは、人間の自由意志の力に着目したものです。すると「人間がいくら自由意志で神の恩寵を受けようとするからといって、神の恩寵が与えられる必然性はない」ということになります。これは当然のこと、もしも人間が神の恩寵を必然的に得ることができるのであれば、神の超越性はなくなってしまいます。神が人間の僕のようになってしまいます。人間の行為に応じて神が必然的に何かをしてくれるということになってしまえば、それはもはや、神と呼ぶに値するものではないでしょう。

もう1つは、人間の自由意志が神の恩寵によって動かされている点に着目したものです。この場合は、神の恩寵を受けることに、ある種の必然性が見出されます。その際に注目すべきは、その必然性が「強制の必然性」ではなく、「不可謬性の必然性」であるとされる点です。

人間の自由意志が神によって動かされるということは強制ではないですが、神が恩寵を与えようとする者には、必ず恩寵が与えられるということです。神であるのだから、間違えようがない。間違えようのない仕方、必然的に恩寵が与えられるということです。

以上のようにトマスは、神が徹底的に助けつつも、人間が自由意志で善を行い、功德を実現するのだと考えました。しかし、人間の自由意志がはたらきを為すことができるのも、神の恩寵が共にはたらいっているからです。人間が善を為すことができるのも、神の秩序づけが前提になっています。このようにトマスは、恩寵を軸としつつ、絶妙な仕方でも両者を、不可欠な要素として統合しているのです。

（文責：親鸞仏教センター）

## 「三宝としてのサンガ論」研究会報告④

# 律蔵から読み解くサンガの特色 —『四分律』受戒羯度を中心として—

戸次 顕彰 (親鸞仏教センター研究員)

本研究会では、三蔵（經・律・論）の中の律蔵に注目して、釈尊とその弟子たちが集う集団において、いかなる現実があり、彼らがいかなる問題と対峙したのかという点を考察している。主なテキストには漢訳律蔵の『四分律』を用い、適宜、他の律を参照するという方法で進めた。本報告では、研究会の中で注目や議論の的となった主な内容を中心に、その一部を報告する。

### ◇「受戒羯度」全体の構造と分岐点

『四分律』「受戒羯度」の前半部分は、釈尊の誕生・出家・成道・初転法輪など、釈尊の生涯の最初期の様相が記録されている。初転法輪以降、釈尊を中心とするサンガは徐々にその規模を大きくしていくが、それが「大比丘衆千二百五十人」の集団形成に至って以降、「受戒羯度」の体裁・内容が大きく変わっていく。すなわち「千二百五十人」以前は、釈尊の足跡を時系列に記録する伝体的体裁であるのに対して、「千二百五十人」以降では、教育・受戒に関する諸規定が説かれていくという内容になっている。その詳細は紙幅の関係で割愛せざるを得ないが、初転法輪直後のような小規模で平和的なサンガであったのが、一転して律の規則によって比丘たちの生活を規定していくようなサンガの形態へと変化しと言え。大規模化により比丘たちの隅々にまで釈尊の眼が行き届かなくなり、釈尊の説いた法と律とによって運営されるサンガへと変化していったと言えるであろう。

### ◇サンガの教育制度—和尚法と弟子法—

このような教団の大規模化によって、サンガには「未だ教誡を受けざる者」が出現し、行儀作法の乱れが生じることとなった。さらにこれらのことと並んで、重大なことのように記述されているのが、病人看護の問題である。ある一人の病比丘を看病する人がいなかったために、その比丘が命終してしまったという問題が起り、そこで釈尊が定めたのが和尚と弟子の制度であった。

「受戒羯度」では、和尚となって具足戒を受けられることのできる資格条件が徐々に制定されていく様子が記載されるが、本研究会で注目した点は、サンガの和尚と弟子の関係が、教育する側・される側といったような一方的な師弟関係ではなく、



研究会風景

先に記した病気の看護が象徴するように、相互に支え合うような関係にあることである。例えば、和尚が道を踏み外しそうになった際には、弟子が和尚を勧奨して正しい方向へ導くことが弟子のつとめ（弟子法）として課せられていることから、こうした関係性が推察される。ちなみに仏教語の弟子とは、「教えを学ぶ者」というような意味で *sissa*, *antevāsika*, *antevāsin* という語が知られるのに対して、パリ語で伝わる律の当該文では、漢訳の「弟子」に対応する言葉が「共に生活する者」といった意味を有する *saddhivihārika* となっている。釈尊のサンガにおける和尚と弟子の関係とは、共に仏道を歩む仲間としての意味があったのではないかと考えている。

◇サンガにおける比丘たちの序列について

また、和尚と弟子の関係と同様に注目される点は、比丘たちの序列がどのようなものであったのかという問題である。これを考える上で興味深いエピソードが、漢訳『五分律』の「受戒法」（『四分律』では「受戒羯度」に相当）末尾にある。

### ◇サンガにおける比丘たちの序列について

それは、比丘たちの間で当初、上下の序列がなく、お互いを恭敬し合っていなかったという状況が記され、それを在家者に指摘・批判されたという話である。在家信者の立場からすれば、複数の比丘を食事に招待するときなどの座次や、供養・礼拝の順番をどうすべきかといった疑問があり、比丘たちの間に序列が無くては困るという問題が生じたと考えられる。

そこで釈尊はまず諸比丘に意見を求めた。比丘たちからは、各々の在家時代の出身階級や家柄、あるいは学習・修行の度合いで序列を決めるべきだという複数の意見が出た。しかし、いずれの意見も釈尊は却下し、ここでキジとサルとゾウの三匹の動物にまつわる昔話（※詳細は紙幅の関係で割愛するが、同様の故事が『四分律』「房舎羯度」や『大智度論』にも見られる）をして、法臘（具足戒を受けてからの年数）によって上座・下座を決めるに至った。このことは、和合を尊重するサンガの特徴を如実に示すものであり、たとえ形式的であっても現代の教団が法臘制度を遺すことの意義や理念を考える上でも重要な点である。

（戸次顕彰）

## 親鸞仏教センターの動き

(2019年5月～2019年7月) 一抄出一

### ■2019年

- 5/7 第121回(通算172回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・東京国際フォーラム)
- 5/8 岡崎教区教化団講習会(赤羽別院):藤村研究員出講
- 5/10 ご命日のつどい
- 5/10,11 東アジア文化交渉学会(ドイツ フリードリヒ・アレクサンダー大学):長谷川研究員発表
- 5/20 第224回英訳『教行信証』研究会  
山陽教区聖教学習会(船場別院):戸次研究員出講
- 5/21 第14回『尊号真像銘文』研究会
- 5/27 第22回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 6/1 第1回「現代と親鸞」公開シンポジウム「くかたられる」死者」 提題:明治学院大学社会学部教授 加藤秀一氏・花園大学文学部教授 師茂樹氏・大正大学非常勤講師 吉水岳彦氏 コメンテーター:南山大学人文学部准教授 佐藤啓介氏 問題提起・総合司会:中村研究員(豊島区・大正大学)
- 6/3 第122回(通算173回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・東京国際フォーラム)
- 6/4 臘扇忌・鸞音忌法要(文京区・親鸞仏教センター) 法話:「独立者——本願に生きる」(講師:中津功氏)
- 6/14 ご命日のつどい  
第201回清沢満之研究会
- 6/18 第225回英訳『教行信証』研究会  
新任研究員研究計画発表会(藤村研究員)
- 6/21 第15回『尊号真像銘文』研究会
- 6/22 第6回『歎異抄』ワークショップ(大谷大学):東研究員発表「金子大榮における歎異抄観」
- 6/25 第23回「三宝としてのサンガ論」研究会  
新任研究員研究計画発表会(東研究員)
- 7/1 第123回(通算174回)「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京八重洲南口)
- 7/6 東海印度学仏教学会第65回学術大会(同朋大学):藤村研究員発表「仏性論争における「世親菩薩」観」
- 7/14 第26回真宗大谷派教学大会(大谷大学):中村研究員発表「法然門流の「註釈活動」——顕意『楷定記』に着目して」
- 7/19 ご命日のつどい  
第1回藤村研究員主宰研究会
- 7/22 第202回清沢満之研究会
- 7/23 第24回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 7/26 第226回英訳『教行信証』研究会
- 7/30 第16回『尊号真像銘文』研究会
- 7/31 第1回東研究員主宰研究会

### ■掲載論文

- 6月 『真宗教学研究』第40号「道宣著作における〈事〉の概念——律蔵を受容した中国人僧の問題意識——」(戸次研究員)

## リレーコラム

### 「近現代の真宗をめぐる人々」第6回

(岩瀬暁燈 [1916-1999])

真宗大谷派の歴史のなかで「暁」を名のる先達たちがいる。暁鳥敏の門流として生きる人々である。老若男女を問わず、様々な苦悩を抱える者たちが、暁鳥という人とその言葉との邂逅を遂げ、「暁」の字を法名にいただき、平等に仏弟子となっていった。岩瀬暁燈もその一人である。

二十歳のころ肺結核を患い、療養所生活中に俳句と出会い、慰問に来た暁鳥と出遇った。「唯一度唯一人の人との出遇い。〔中略〕その人に遇ったらもう畢」(『句と文 無二』、畢鉢羅窟、1995)であった。1943年4月、石川県松任(現:白山市)にある暁鳥の自坊、明達寺の門を叩き、翌年に得度式を受けて「釈暁燈」を名のる。以来、かつての実名であった「豊」を仮名とした。

彼岸からの言葉を聞き、自己に密着する言葉をあらわした。『葉々』(羅雲巢、1987)、『句集 私見』(同、1989)などが遺されている。逗留先の海辺でしばしば流木をひろい、句を書きつけ、同行たちに手渡したという。1999年11月19日、83才のとき「松風院釈暁燈」として命終。「松風」は松任の風だろうか。西村見暁と林暁宇の二人が読んだ弔辞は床にとどくほど懇ろであったと聞く。(東真行)



## あとがき

先日、安楽死を取り上げたドキュメンタリーを観た。難病を患い外国での安楽死を選んだ一人の女性と、同じ難病を患いながらも生きることを選んだもう一人の女性を対照的に描いていた。本来、どうしようもできないはずの生死を個々の選択によって決めてしまうということに人間の傲慢さを感じる一方、安楽死によって最期を迎えた際の穏やかな表情も忘れられない。

これからも安楽死もしくは尊厳死に関する議論はし尽されることはないだろう。自らが、または、家族がそういった選択をせまられるかもしれない。「死」だけは平等にやってくる。不特定多数の「誰かの死」だけではなく、「自らの死」でもあるということを改めて考えなければならぬと感じた。(佐々木啓)